善　太　と　三　平

小学生の時は先生に本を読んで貰ったり、物語を話して貰ったりしたことがよくあった。その内容は学年が上がるに従って単純な童話から少しずつ複雑で深刻さを帯びたり、登場人物にリアリティが出てくる。生徒達は皆真剣に聞いた。特に榛葉礼一先生の話には臨場感があり、聞いている生徒達は話の中に引き込まれ、主役になったような気分で聞いたものだ。

四年の時の担任の高田幸男先生であったか五年の時の担任の柴田照二先生であったか、或いは榛葉先生であったか今となっては定かでないが、作家坪田譲治（敬称略）の、善太と三平という兄弟が登場する小説を読んで貰ったことがある。その小説の題名が何であったか、どのような筋書きであったか全て忘れてしまったが、妙に私の心を捕えた。これに刺激されてその頃図書館で何冊か読んだ記憶があるがその筋書きも忘れてしまっていた。

ところが、今年の一月たまたまデパートの一角で催されていた古本市に何の気なしに足を止めたところ、新日本文學全集第十四巻坪田譲治全集（昭和十七年発行）が目に飛び込んできた。これを三百円で買い求めて直ちに読んだ。この本には善太・三平兄弟が織りなす長編が一編と短編が六編収録されている。四十数年振りに改めて私の幼少時の坪田評価が正しかったことが確認でき、また、今更ながら坪田の、こどもの心理描写の的確さに驚かされた。騙された積りでもよいので是非御一読願いたい。坪田によると「昭和九年から十三年にかけての五年ばかりは私の一番苦しかった時で、また一番勉強した時であった」とのことである。このような時に書かれたものがこの七編であり、私のバイブルとなった。

【平成 15 年 8 月 11 日　静岡新聞　夕刊　掲載】